

二〇一六年七月一九日(参加者一七名)

白蓮をまたぐ朱色の太鼓橋	かし
本殿へ急磴のぼる青嶺かな	かし
お手植の大樹あまたの蝉の殻	かし
中腹に宝珠輝く青嶺かな	かし
山門を額縁として青嶺見ゆ	よう子
本堂の鈴の緒重く梅雨じめり	よう子
白蓮の一茎たかく池統ぶる	よう子
橋裏にかげるふ水の影涼し	よう子
涼しさに足投げ出しぬ展望台	わかば
隠沼を埋めつくして未草	わかば
梅雨明けの樹間を縫ひて陽の光	わかば
万緑を抽んで立つ大鐘楼	わかば
展望閣足下より湧く蝉の声	ひかり
大いなるパンくず担ぐ山の蟻	ひかり
水煙の青嶺へ尖る神呪寺	ひかり
標たつ寺領ここより登山道	小袖
天蓋のなき母子像へ白日傘	小袖
太鼓橋かかる蓮池風わたる	ほんこ

風化して傾ぐ石龕苔の花	ほんこ
蓮池をまたぎて朱き太鼓橋	満天
万緑裡八十八ヶ所巡拝す	満天
万緑や七堂伽藍埋まるほど	よし子
甲山こんなな風の涼しとは	よし子
頼みとす鉄の手摺の灼けたれど	明日香
展望閣眼下をよぎるつばくらめ	こすもす
うち仰ぐ指呼の山頂夏燕	せいじ
撫で仏灼けて触るるを拒みけり	たか子
甲山見おろして立つ雲の峰	直子
寧かれと俳人塚へ萩の風	菜々
梵鐘をひと撞き暑気を抜ひけり	宏虎
嶮磴に仰ぐ青葉の甲山	有香

定例会の選

二〇一六年七月一九日(参加者一七名)